

絶滅危惧種の蝶 ウスイロヒョウモンモドキの保全活動

久保弘幸（兵庫ウスイロヒョウモンモドキを守る会）

はじめに

ウスイロヒョウモンモドキは、タテハチョウ科に属し、モンシロチョウと同じか、やや小さめのチョウである。生息地は環境の良い草原である。環境省のレッドリストでIA類に分類されており、日本でも最も絶滅の恐れが高いチョウの一つとされている。

かつては近畿地方から中国地方にかけて、多くの生息地が存在したが、1980年代以降急激に衰退し、現在では兵庫県の但馬地域のほか、岡山・鳥取などにわずかな生息地を残すのみとなっており、2011年の時点で、生息地の約90%が失われている。

兵庫県でも2000年代初めには生息個体数が著しく減少し、絶滅直前の状況となった。このため、2003年にチョウ愛好家の有志が「守る会」をつくり、保全活動をおこなってきた。



写真1 ウスイロヒョウモンモドキ
(養父市ハチ高原)

表 ウスイロヒョウモンモドキの周年経過

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
幼虫(休眠)			幼虫		蛹	成虫	卵	幼虫	幼虫(休眠)		

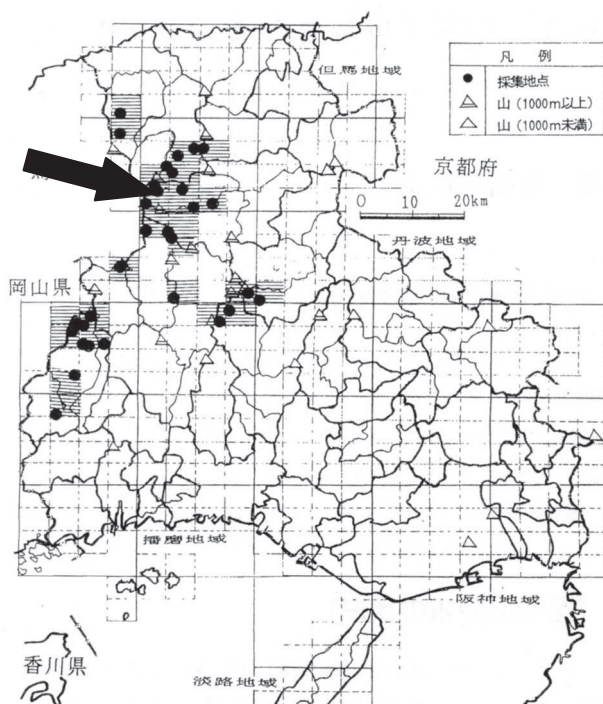


図1 ウスイロヒョウモンモドキ生息地の衰退（広畑・近藤 2007より作成）

1970年代以前には、西播磨地域～但馬地域にかけて多数の生息地が見られたが、西播磨地域のうち佐用郡では1980年代までに、ほぼすべての生息地が失われた。

その後2000年ごろまでに、宍粟郡の生息地でも絶滅が進み、2000年ごろには、養父市葛畑、同市別宮と高丸山の3か所となった。

2000年以降には葛畑・別宮でもしだいに見られなくなり、2010年代には高丸山生息地（矢印）を残すのみとなった。

★衰退の理由

- (1) 開発や植生の変化によって生息環境が失われた
(草原での放牧や飼料用の草刈りがおこなわれなくなった)
- (2) 限られた生息地に採集者が集中した結果、乱獲によって絶滅した

★高丸山生息地でも、2003年ごろには1日に数頭を見かけるのみとなった

保全活動の方法と経過

保全活動は、本種の生息状況解明と採集の抑制、生息環境整備を並行して実施してきた

(1) 保全活動初期(2003～2005年ごろ)＝生息状況調査および生息環境調査と採集自粛要請

- ① トランセクト方式による生息状況調査
- ② 植生調査および気象観測(気温・湿度・地温・風速・日照時間等)
- ③ 生息地での採集自粛要請看板設置・現地での直接的自粛要請と学術誌誌上等での呼びかけ
- ④ 生息地での草刈り時期・草丈等の調整
- ⑤ 地元農家への委託による食草オミナエシの増殖と生息地への植栽
- ⑥ 普及活動：夏＝蝶観察会・秋＝オミナエシ植栽会 地元中学校への出前授業

(2) 安定期(2006～2011年ごろ)＝個体数の増大から安定へ

- ① 前段階の調査ほかの事業を継続(民間助成金の獲得による活動)
- ② 法的背景の進展：**自然公園法の指定動物**となる(2006年)

(3) シカ害による急激な個体数減衰への対応(2012～)と種の保存法による指定

- ① 2012年ごろからの急激な個体数減衰：要因はシカ害
- ② 対応の変更：これまでの事業を継続しつつ人工増殖と生息地への計画的放虫
- ③ **種の保存法による指定動物**となる(2016)：県および地元市町を含む「高丸山ウスイロヒョウモンモドキ保全再生推進協議会」の発足と環境省補助金による事業開始
- ④ シカ害防止のため生息地の囲い込み(2016～)

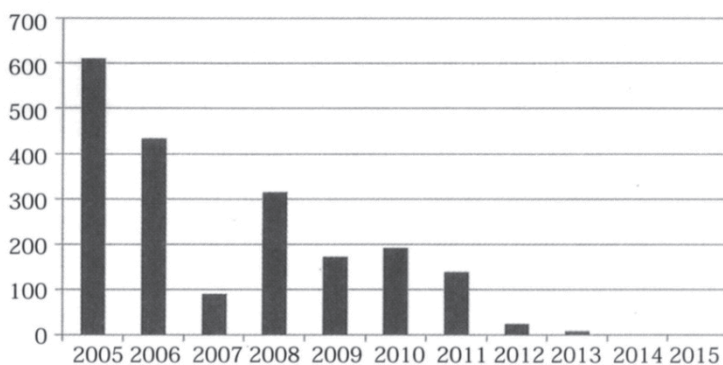


図2 トランセクトで観察されたウスイロヒョウモンモドキ
確認総個体数の変化

2003年にはきわめて少数しか見られなかった個体数が、採集禁止の呼びかけと草刈り時期や高さの調整によって急速に回復した(2005年)。

その後はゆるやかに減少し、2008年ごろからは安定期に入ったと思われたが、2012年に急減し、2014年にはトランセクトコース上では見られなくなった。

2007年の個体数が少ないのは、成虫の最盛期に調査できなかったためだが、マーキングにより発生数は多かったことが確認されている。

結果と考察

- (1) 採集を抑制すれば相当程度の個体数回復効果がある。
- (2) 年に2回程度の草刈りを恒常的に実施することでススキの優占を防ぎ、食草のオミナエシおよび成虫の蜜源植物を維持することが可能である。
- (3) シカの侵入で、食草・蜜源植物が大きな被害を受けたことが、個体数の激減に直結した。
- (4) 緊急避難として人工採卵～累代飼育を実施して、個体を確保している(生息域外保全)。
- (5) シカの排除は困難であるため、生息地の一部をシカ除け網で囲い込み、その内部で草刈り、食草および蜜源植物の植栽と幼虫の放虫を行うことで、産卵、幼虫の越冬巣が確認されるようになった。
- (6) 今後は人工増殖と現地放虫をおこないつつ、保全範囲内の環境を維持することで自然繁殖個体を回復させるとともに、これまでの事業を継続することでより高い保全効果を目指したい。



生息地の環境（養父市高丸山）



獣糞に集まったウスイロヒヨウモンモドキ



採集禁止の呼びかけ



夏の観察会



オミナエシの育苗



地元地区によるオミナエシの植栽会



生息地に設けられた鹿よけネット



トランセクト調査の状況